

# 看護学生の就学意欲に影響を及ぼす要因

青柳涼子\*

本研究の目的は、看護学生の就学意欲に影響を及ぼす要因を明らかにすることにある。看護専門学校または4年制大学の看護科に通う学生約160人を対象に調査票調査を行い、所属する学校に対する評価、困ったときに相談できる人の有無、看護師の仕事に対する評価、就学意欲などに関するデータを収集し、相互の関連を分析した。

その結果、社会人などを経験してから入学した者は、授業への満足度が就学意欲を規定する要因になっていた。一方、高校を卒業後すぐに入学した者は、授業への満足度のほか、相談できる友人の有無や看護師の仕事の職業的価値に対する評価が就学意欲を規定していた。また、看護師の仕事の労働条件に対する評価は、看護学生の就学意欲と明確な関連がないという知見も得られた。

キーワード：就学意欲、授業満足度、職業的価値、看護教育

## 1. 研究の目的

日本の18歳人口は1992年の約205万人をピークに急速に減少し、2010年には約122万人になり、ここ10年間はおおよそ横ばい状態を維持してきた<sup>1)</sup>。一方、高等教育機関の学校数は、1992年の3,994校から2000年に4,286校まで増加した後、2010年には4,135校、2020年は3,954校と、わずかに減少しているものの大きな変化はない。ただし、大学の数に限定すれば、短大の大学への改組が主たる理由となって増加傾向にあり（1992年523校→2020年795校）、とりわけ看護学部など看護師養成課程をおく大学の増加は顕著である<sup>2)</sup>。看護師養成課程をおく大学の数は、2010年の193校から2020年の293校へと増加しており、入学者数も17,085人から25,815人へと1.5倍になっている<sup>3)</sup>。

看護系学部は医歯薬系学部と同様、在学中に資格を取得し、卒業後はその資格を活かした職業に従事することを希望する入学者が多いといわれる。じっさい、2020年に看護師養成課程をおく学校を卒業後、看護師として就業した者の割合は88.2%と9割に迫る<sup>4)</sup>。看護学生を対象とした入学・志望動機の調査も、その上位に看護師の資格取得が挙げられ、かつ、多数派であることを

---

\* 淑徳大学大学院総合福祉研究科 コミュニティ政策学部准教授

示している（一柳・谷山ほか 2009, 大鳥・福島 2017）。

しかしながら、複数の研究が多様な入学動機を持つ看護学生 の存在を指摘する（竹本 2008, 一柳・谷山ほか 2009, 榎本・田邊 2012, 大鳥・福島 2017）。たとえば、家族など他者の勧めで入学した者や「とりあえず大学に入学したかった」といった消極的理由で入学した者、そもそも入学を希望していなかった者や卒業後に看護職への就職を希望しない者などである。資格取得を前提とするカリキュラムのなかで、そのような学生のキャリア観にどうアプローチし、学習意欲を維持、あるいは、より高めていくかは非常に大きな課題といえよう。

古川秀敏らの研究によれば、看護系大学生について「医療関係の分野に興味があるから」という入学動機を有する者はそうではない者よりも学習意欲が高い（古川・小出ほか 2016）。また、入学動機の違いが学生の自己教育力に関連することを明らかにした研究（榎本・田邊 2012）や、看護系大学生の職業志望動機とストレス反応およびストレス対処力との関連を明らかにした研究（大鳥・福島 2017）もある<sup>5)</sup>。こうした研究成果は、何らかの消極的理由で入学した学生の学習意欲を高める教育的対応・支援が求められることを示唆するものである。

もっとも、当然のことながら入学・志望動機のみが在学中の学習意欲の高低を決定するのではないだろう。看護学生にとって臨地実習は最大の課題であり、学習上の危機であるという（住谷・甘佐ほか 2015）。住谷圭子らは、看護専門学校を卒業した新人看護師13名に面接調査を行い、学業継続に影響する要因を析出している。それによれば、困難要因は「実習を通じて感じた困難な体験」「日々の学習を通して感じた困難な体験」「学生生活を通して感じた人間関係の困難な体験」に集約される一方、継続を支えた要因に「自己の気持ちの持ち方」「自己の行動の工夫」のほか「支援してくれる人の存在」があるという（住谷・甘佐ほか 2015）。自己の看護師としての資質が問われるような現場体験が学業継続の困難要因となること、また、人間関係は、困難要因にも継続要因にもなり得ることがわかる。

ひとり暮らし高齢者の増加や介護者の高齢化にともない、医療や介護、予防、生活支援を一体的に提供しようとする「地域包括ケアシステム」の整備が進められるなか、在宅医療を支える看護師の存在がますます求められている。完全な収束が未だみえない感染症拡大防止のためのワクチン接種の担い手としても大きな期待が寄せられている。看護師の有資格者の復職支援、離職防止・定着促進とともに、看護学校への入学者の増加と退学者の減少は、看護師数の維持・増加に有効な手立てである。何が看護学生の就学意欲に影響を与えているのか、さまざまな角度から検討することは一定の意義があるといえるだろう。

本研究の目的は、看護学生の就学意欲に影響を及ぼす要因を明らかにすることにある。具体的には「学校に対する評価」、相談できる教員・友人の有無ではかる「学内の人的資源」、そして「看護師の仕事に対する評価」が「就学意欲」といかなる関係にあるかを検討するものである。

## 2. 調査の概要

### 調査対象

千葉県看護系大学1校、看護専門学校1校、埼玉県内の看護専門学校1校に通う学生で調査の趣旨を説明し、協力が得られた者。学校の選定は有意抽出による。

### 調査時期

2020年11月17日～20日

### 調査方法

自記式質問紙を用いた集合調査

### 有効回収票数

163票（回収した170票のうち、未記入や不備があるものを除外した）

### 調査項目

調査票では、性別・年齢・現在の学校に入学する前の経歴のほか、学内で相談できる人の有無・学校への満足度・就学意欲・幼少期の被看護経験・看護師の仕事に対する評価・ワークライフバランスに対する意識などを尋ねた。

### 倫理的配慮

調査の実施にあたっては、本調査の趣旨を伝え、協力は自由意志であり学業成績とは無関係であること、調査は無記名で、結果は統計的に処理され個人や学校名が特定されないことを文書および口頭で説明した。研究協力の意思は、質問紙の回収をもって同意を確認することとした。なお、本研究は、淑徳大学大学院の授業「量的調査の理論と実際」の授業の一環で実施した「看護学生の職業観とワークライフバランスに関する調査」のデータを使用するものである。

## 3. 結果

### 3-1. 各変数の基礎集計

#### 基本属性

本調査では、調査対象者の基本属性として、性別、年齢、現在の学校に入学する前の経歴を尋ねている。それぞれの分布を表1に示す。

有効回収票（163票）のうち、女性が9割を占め、男性は1割にとどまった。2020年度「学校基本調査」によれば、看護師養成課程における男性割合は、大学の場合8.9%、短大の場合8.6%、専修学校の場合12.7%であり、本調査の男性比率はそれらと同程度といえる。

回答者の年齢は18歳から54歳までと幅広いが、表1が示すように全体の半数は10代で、これに20代を加えると全体の8割を超える。

表1 基本属性

		n	%
性別	女性	144	88.3
	男性	19	11.7
年齢	10代	83	50.9
	20代	56	34.4
	30代	15	9.2
	40代以上	9	5.5
高校卒業直後の入学か	はい	111	68.1
	いいえ	52	31.9

現在の学校に入学する前の経歴（以下、入学前の経歴）を知るために「あなたは、高校卒業後すぐにこの学校に入学しましたか」という問いを用意し、「はい」「いいえ」の2択で回答を得た。「はい」と回答した者、すなわち高卒直後に現在の学校へ入学した者（以下、高卒直後入学者）は111名で約7割を占め、「いいえ」と回答した者、すなわち社会人等を経験してから現在の学校へ入学した者（以下、社会人等経験者）は52名で約3割だった。

なお、後者の52名に対し、入学前に何をしていたかを尋ねたところ、「看護師・看護助手以外の仕事をしていた」という回答が21名で最も多く、次いで「看護師・看護助手として働いていた」が17名、「その他」が13名だったほか、無回答が1名いた。

上述のとおり、本調査の回答者の9割は女性である。高卒直後入学者に限定した場合、その傾向は顕著で、女性が93.7%（111名中104名）を占める。他方、社会人等経験者に限定すると女性の割合は76.9%（52名中40名）となり、男性比率が相対的に高い。

次に、回答者の入学前の経歴と年齢の関連を確認すると、高卒直後入学者111名の平均年齢は19.2歳、標準偏差1.011、最小値18、最大値23、歪度1.837、尖度5.501であった。一方、社会人等経験者52名の平均年齢は30.1歳、標準偏差8.204、最小値19、最大値54、歪度0.951、尖度0.344であった。以上から、高卒直後に現在の学校へ入学した者は若年層に集中していること、他方、高卒直後に現在の学校へ入学していない者の年齢は、若年層も一部含まれるものの、平均年齢は高く、かつ、年齢のばらつきが大きいことがわかる。

全体としては若年層が多く、30代以降の各世代のケース数が非常に少ないため、本研究の基礎集計に使用する変数は、年齢ではなく、入学前の経歴と性別の2変数とする。

### 学校に対する評価

学校に対する満足度を、授業・学校設備・課外活動・立地・学費の5つの項目で尋ねたところ、表2の結果が得られた。

表2 学校に対する評価 (%)

	n	とても満足	満足	不満	とても不満
授業	162	5.6	56.8	31.5	6.2
学校設備	162	14.8	56.8	23.5	4.9
課外活動	158	5.1	51.3	37.3	6.3
立地	162	16.7	42.0	22.8	18.5
学費	162	6.8	50.6	30.9	11.7

表3 基本属性と「学校に対する評価」

性別 × 「学校に対する評価」

		n	満足群	不満足群	P値	
授業	女性	143	63.6%	36.4%	0.450	n.s.
	男性	19	52.6%	47.4%		
学校設備	女性	143	76.2%	23.8%	0.001	**
	男性	19	36.8%	63.2%		
課外活動	女性	139	59.7%	40.3%	0.026	*
	男性	19	31.6%	68.4%		
立地	女性	143	59.4%	40.6%	0.625	n.s.
	男性	19	52.6%	47.4%		
学費	女性	143	55.9%	44.1%	0.335	n.s.
	男性	19	68.4%	31.6%		

入学前の経歴 × 「学校に対する評価」

		n	満足群	不満足群	P値	
授業	高卒直後入学者	111	71.2%	28.8%	0.001	**
	社会人等経験者	51	43.1%	56.9%		
学校設備	高卒直後入学者	111	82.9%	17.1%	0.000	***
	社会人等経験者	51	47.1%	52.9%		
課外活動	高卒直後入学者	108	65.7%	34.3%	0.001	**
	社会人等経験者	50	36.0%	64.0%		
立地	高卒直後入学者	111	56.8%	43.2%	0.497	n.s.
	社会人等経験者	51	62.7%	37.3%		
学費	高卒直後入学者	111	55.0%	45.0%	0.395	n.s.
	社会人等経験者	51	62.7%	37.3%		

\* : p&lt;.05 \*\* : &lt;.01 \*\*\* : &lt;.001 (Fisherの直接確率検定)

5項目とも最も多かったのは「満足」で、次に多かったのは「不満」という回答であった。「とても満足」と「満足」を合わせて「満足群」、「とても不満」と「不満」を合わせて「不満足群」とし、性別および入学前の経歴とクロス集計した結果を表3に示す。なお、P値はフィッシャーの直接確率検定の結果である。

性別によって満足度に有意な差がみられた項目は、学校設備と課外活動の2項目であった。男性のほうが女性よりも学校設備や課外活動に不満を感じていることがわかる。

次に、入学前の経歴によって有意な差がみられた項目を確認してみると、授業と学校設備と課外活動の3項目であり、いずれも社会人等経験者のほうが高卒直後入学者よりも不満を感じている、という結果であった。前述のとおり本調査では、現在の学校へ入学する前の経歴（入学前に何をしてきたか）も尋ねており、そのデータと授業への満足度の関連をみたところ、有意な差はなかった。看護師・看護助手経験の有無にかかわらず、社会人等経験者の授業への満足度は低い傾向が確認された。

### 学内の人的資源の有無

学内の人的資源の有無を尋ねる項目として、「あなたには、困ったときにすぐに相談できる教員がいますか」と「あなたには、学内に、困ったときにすぐに相談できる友人がいますか」という2つの設問、および「たくさんいる」「まあまあいる」「あまりいない」「いない」という4つの選択肢を用意した。表4に示すように、相談できる教員については「あまりいない」が38.7%で最も多く、「まあまあいる」(30.1%)、「いない」(28.2%)と続き、「たくさんいる」と回答した者は3.1%と少なかった。相談できる友人については、「まあまあいる」が67.5%で、これに「たくさんいる」(19.0%)を合わせると9割近くになる。

表4 相談できる人の有無 (%)

	n	たくさんいる	まあまあいる	あまりいない	いない
相談できる教員	163	3.1	30.1	38.7	28.2
相談できる友人	163	19.0	67.5	8.6	4.9

表5 基本属性と「相談できる人の有無」

#### 性別 × 「相談できる人の有無」

		n	いる群	いない群	P値	
相談できる教員	女性	144	29.2%	70.8%	0.008	**
	男性	19	63.2%	36.8%		
相談できる友人	女性	144	87.5%	12.5%	0.293	n.s.
	男性	19	78.9%	21.1%		

#### 入学前の経歴 × 「相談できる人の有無」

		n	いる群	いない群	P値	
相談できる教員	高卒直後入学者	111	33.3%	66.7%	1.000	n.s.
	社会人等経験者	52	32.7%	67.3%		
相談できる友人	高卒直後入学者	111	87.4%	12.6%	0.630	n.s.
	社会人等経験者	52	84.6%	15.4%		

\*\* : <.01 (Fisherの直接確率検定)

「たくさんいる」と「まあまあいる」を足し上げて「いる群」, 「いない」と「あまりいない」を足し上げて「いない群」としたうえで, 男女別と入学前の経歴との関連をみた結果が表5である。

相談できる教員の有無について, 性差が確認された。男性の場合, 「いる」の割合は6割を超えるが, 女性の場合は3割に届かない。女性よりも男性のほうが学内に相談できる教員がいることがわかった。相談できる友人の有無に関しては, 性差はみられなかった。

また, 入学前の経歴による差は, 教員の有無・友人の有無のいずれの分析においてもみられなかった。

### 看護師の仕事に対する評価

看護師の仕事をどのように評価しているかを知るために, 次の10項目を用いた。「使命感, 責任感を伴うやりがいのある仕事」「人命に関わる尊い仕事」「世の中や人のためになる仕事」「失業する恐れが低い仕事」「社会的に評価が高い仕事」「忙しくて, きつい仕事」「汚い仕事」「危険な仕事」「夜勤などがあって, 生活が不規則な仕事」「待遇や福利厚生が充実していない仕事」である。これらに対し, 調査対象者は「そう思う」「どちらかといえばそう思う」「どちらかといえばそう思わない」「そう思わない」の4件法で回答した。その基礎集計の結果が, 表6である。

「そう思う」という回答が6割を超えた項目は, 「使命感, 責任感を伴うやりがいのある仕事」

表6 看護師の仕事に対する評価

(%)

	n	そう思う	どちらかといえば そう思う	どちらかといえば そう思わない	そう思わない
使命感, 責任感を伴う やりがいのある仕事	163	69.9	27.6	1.8	0.6
人命にかかわる尊い仕事	163	79.8	18.4	0.6	1.2
世の中や人のためになる仕事	163	69.3	27.0	1.2	2.5
失業する恐れが低い仕事	163	46.3	24.7	9.3	19.8
社会的に評価が高い仕事	163	37.4	49.1	11.7	1.8
忙しくて, きつい仕事	163	71.8	24.5	1.2	2.5
汚い仕事	163	17.2	36.2	29.4	17.2
危険な仕事	163	39.3	38.0	17.8	4.9
夜勤などがあって, 生活が不規則な仕事	163	61.3	29.4	5.5	3.7
待遇や福利厚生が充実して いない仕事	163	12.9	32.5	41.1	13.5

「人命に関わる尊い仕事」「世の中や人のためになる仕事」「忙しくて、きつい仕事」「夜勤などがあって、生活が不規則な仕事」の5項目であった。これらの項目は、「どちらかといえばそう思う」の割合も高かった。

残る5項目のうち、「失業する恐れが低い仕事」「汚い仕事」「待遇や福利厚生が充実していない仕事」の3項目は回答が偏らず、回答者によって評価が異なっていた。

看護師の仕事に対する評価を構成する因子を析出するため、因子分析を行った。複数の因子に同程度に高い負荷量が確認された「失業する恐れが低い仕事」という項目を除外し、9項目について因子数を2に固定した因子分析を行った<sup>6)</sup>。その結果を表しているのが表7である。

第1因子は、夜勤や忙しさ、待遇に関する項目に高い負荷がみられたため、労働条件因子と解釈した。第2因子は、使命感や仕事の重要性、社会的評価に関する項目に高い負荷がみられたため、職業的価値因子と解釈した。

次に、労働条件因子を構成する5項目それぞれについて、「そう思う」という回答に4点、「どちらかといえばそう思う」に3点、「どちらかといえばそう思わない」に2点、「そう思わない」に1点を与えた。

以上5項目のクロンバック $\alpha$ 係数は、0.687 (n=163) であった。0.7をわずかに下回るが、内的一貫性があるものと判断した。5項目の総和を算出し、合計得点が低いほど看護師の労働条件に対する評価が高いという「労働条件尺度」を作成した。労働条件尺度の統計量は、平均15.24、標準偏差2.773、最小値5、最大値20、歪度-0.614、尖度0.599である。

この労働条件尺度を使用して調査対象者をおよそ半数ずつの2つのグループに分けた。上述のように、合計得点が低いほど看護師の労働条件に対する評価が高い、ということになるため、15

表7 「看護師の仕事に対する評価」の因子分析結果

	労働条件因子		職業的価値因子	
	第1因子	第2因子	第1因子	第2因子
夜勤などがあって、生活が不規則な仕事	0.710		0.051	
汚い仕事	0.708		-0.070	
危険な仕事	0.702		-0.078	
忙しくて、きつい仕事	0.648		0.268	
待遇や福利厚生が充実していない仕事	0.555		-0.228	
使命感、責任感を伴うやりがいのある仕事	-0.130		0.828	
人命にかかわる尊い仕事	-0.101		0.748	
世の中や人のためになる仕事	0.188		0.734	
社会的に評価が高い仕事	-0.015		0.586	
因子間相関II		-0.009		

因子抽出法：主成分分析

回転法：Kaiserの正規化を伴うプロマックス法



点以下を「高群」, 16点以上を「低群」とした。「高群」は全体の51.5%, 「低群」は全体の48.5%を占める<sup>7)</sup>。

次に, 職業的価値因子を構成する4項目それぞれについて, 「そう思う」という回答に1点, 「どちらかといえばそう思う」に2点, 「どちらかといえばそう思わない」に3点, 「そう思わない」に4点を与えた。

以上4項目のクロンバック $\alpha$ 係数は, 0.694 (n=163) であった。こちらも0.7をわずかに下回るが, 内的一貫性があると判断し, 4項目の総和を算出, 合計得点が低いほど職業的価値に対する評価が高いという「職業的価値尺度」を作成した。職業的価値尺度の統計量は, 平均5.71, 標準偏差1.763, 最小値4, 最大値11, 歪度0.968, 尖度0.045である。

この職業的価値尺度を使用し, 調査対象者を2つのグループに分けた。上述のように, 合計得点が低いほど看護師の職業的価値に対する評価が高い, ということになるため, 5点以下を「高群」, 6点以上を「低群」とした。分布の関係上, 同規模のグループを作ることができず, 「高群」は全体の60.1%, 「低群」は全体の39.9%である。

表8は, 基本属性と「職業的価値に対する評価」「労働条件に対する評価」の関連をみた結果を示している。4つの分析のなかで, 唯一, 職業的価値に対する評価と入学前の経歴との間に有意な関連がみられた。社会人等経験者よりも高卒直後入学者のほうが看護師の職業的価値について高い評価をしていることが明らかになった。

**表8 基本属性と「労働条件に対する評価」「職業的価値に対する評価」**  
性別 × 「労働条件に対する評価」

	n	高群	低群	P値	
女性	144	51.4%	48.6%	1.000	n.s.
男性	19	52.6%	47.4%		

入学前の経歴 × 「労働条件に対する評価」

	n	高群	低群	P値	
高卒直後入学者	111	50.5%	49.5%	0.738	n.s.
社会人等経験者	52	53.8%	46.2%		

性別 × 「職業的価値に対する評価」

	n	高群	低群	P値	
女性	144	61.8%	38.2%	0.319	n.s.
男性	19	47.4%	52.6%		

入学前の経歴 × 「職業的価値に対する評価」

	n	高群	低群	P値	
高卒直後入学者	111	74.8%	25.2%	0.000	***
社会人等経験者	52	28.8%	71.2%		

\*\*\* : <.001 (Fisherの直接確率検定)

### 就学意欲

調査対象者の就学意欲をはかるため、調査票では「あなたは、この学校をやめたいと思ったことがありますか」という設問を用意し、回答は「頻繁に思う」「たまに思う」「あまり思わない」「全く思わない」の4件法で得た。

いま通っている学校をやめたいと「頻繁に思う」と回答した者は163ケース中42ケース（25.8%）であった。実に4人に1人が学校を頻繁にやめたいと思っているという結果であった。「たまに思う」は57ケース（35.0%）、「あまり思わない」は37ケース（22.7%）、「まったく思わない」は27ケース（16.6%）であった（表は省略）。

次に、学校をやめたいと頻繁に思うか否かで対象者を2グループに分け、基本属性との関連を検討した（表9）。その結果、性別による有意な差が確認された。およそ3割が学校をやめたいと「頻繁に思う」と回答した女性とは異なり、学校をやめたいと「頻繁に思う」男性は一人もいなかった。

就学意欲について入学前の経歴による差はみられなかった。

表9 基本属性と「就学意欲」

性別 × 「就学意欲」					
	n	頻繁に思う	それ以外	P 値	
女性	144	29.2%	70.8%	0.004	**
男性	19	0.0%	100.0%		
入学前の経歴 × 「就学意欲」					
	n	頻繁に思う	それ以外	P 値	
高卒直後入学者	111	27.9%	72.1%	0.443	n.s.
社会人等経験者	52	21.2%	78.8%		

\*\*：<.01 (Fisherの直接確率検定)

### 3-2. 就学意欲を規定する要因分析

前述のとおり、調査対象者の4人に1人が現在通っている学校を頻繁にやめたいと思っていた。では、どのような要因が彼らの就学意欲を規定しているのだろうか。

学校に対する評価（授業への満足度）、学内の人的資源（相談できる教員・友人の有無）、看護師の仕事に対する評価（職業的価値と労働条件に対する評価）、および基本属性として入学前の経歴の計4つを独立変数、就学意欲（学校を頻繁にやめたいか、否か）を従属変数とする二項ロジスティック回帰分析を行った。今回、調査対象に男性が少なく、また、表9が示したように学校をやめたいと「頻繁に思う」男性がいなかったことから、女性サンプルのみを分析の対象にした。

入学前の経歴は、高卒直後入学者を1、社会人等経験ありの者を0とした。学校への評価は授業への満足度のみを使用し、不満足群を1、満足群を0とした。相談できる人の有無については教員と友人のそれぞれについて、いない群を1、いる群を0とした。職業的価値に対する評価と

表 10 就学意欲を従属変数にしたロジスティック回帰分析結果

## 1. 全ケース

	B	P 値		Exp (B)
入学前の経歴 (高卒直後入学者 = 1, 社会人等経験者 = 0)	1.135	0.040	*	3.112
授業への満足度 (不満足群 = 1, 満足群 = 0)	1.424	0.002	**	4.153
相談できる教員の有無 (いない群 = 1, いる群 = 0)	0.248	0.615		1.282
相談できる友人の有無 (いない群 = 1, いる群 = 0)	1.186	0.044		3.273
職業的価値に対する評価 (低群 = 1, 高群 = 0)	1.146	0.013	*	3.146
労働条件に対する評価 (低群 = 1, 高群 = 0)	0.425	0.297		1.529
N	143			
p	0.000			
Cox-Snell R <sup>2</sup>	0.163			
Nagelkerke R <sup>2</sup>	0.232			
Hosmer と Lemeshow の検定 有意確率	0.444			

## 2. 社会人等経験者のみ

	B	P 値		Exp (B)
授業への満足度 (不満足群 = 1, 満足群 = 0)	3.302	0.011	*	27.169
相談できる教員の有無 (いない群 = 1, いる群 = 0)	-1.223	0.278		0.294
相談できる友人の有無 (いない群 = 1, いる群 = 0)	1.491	0.267		4.443
職業的価値に対する評価 (低群 = 1, 高群 = 0)	-0.125	0.904		0.882
労働条件に対する評価 (低群 = 1, 高群 = 0)	-1.781	0.074	†	0.168
N	39			
p	0.009			
Cox-Snell R <sup>2</sup>	0.265			
Nagelkerke R <sup>2</sup>	0.381			
Hosmer と Lemeshow の検定 有意確率	0.722			

## 3. 高卒直後入学者のみ

	B	p		Exp (B)
授業への満足度 (不満足群 = 1, 満足群 = 0)	1.186	0.032	*	3.273
相談できる教員の有無 (いない群 = 1, いる群 = 0)	0.644	0.298		1.904
相談できる友人の有無 (いない群 = 1, いる群 = 0)	1.622	0.030	*	5.061
職業的価値に対する評価 (低群 = 1, 高群 = 0)	1.658	0.003	**	5.248
労働条件に対する評価 (低群 = 1, 高群 = 0)	0.965	0.055	†	2.626
N	104			
p	0.000			
Cox-Snell R <sup>2</sup>	0.224			
Nagelkerke R <sup>2</sup>	0.318			
Hosmer と Lemeshow の検定 有意確率	0.902			

† : p&lt;.1 \* : p&lt;.05 \*\* : &lt;.01

労働条件に対する評価のそれぞれについて、低群を1，高群を0とした。最後に、学校をやめたいと「頻繁に思う」が1，「頻繁には思わない」が0である。

女性サンプルの全てを対象にした分析結果を表10の「1. 全ケース」に示す。本表から、授業に対して不満を感じている場合、看護師の仕事の職業的価値に対する評価が低い場合、そして高卒直後入学者である場合に、学校を頻繁にやめたいと思う傾向が確認された。相談できる教員や友人の有無、労働条件に対する評価は、就学意欲に影響を与えていなかった。

社会人等経験者のみに限定した分析結果を表10の「2. 社会人等経験者のみ」に示す。社会人等を経験した者の就学意欲は、授業への満足度によって規定されていた。相談できる人の有無や職業的価値は彼らの就学意欲に影響を与えていなかった。

次に、高卒直後入学者のみに限定した分析結果を表10の「3. 高卒直後入学者のみ」に示す。高校を卒業後すぐに現在の学校に入学した者の就学意欲には、授業への満足度のほか、看護師の仕事の職業的価値に対する評価や相談できる友人の有無が影響していた。

授業への満足度は、社会人等経験者と高卒直後入学者、双方の就学意欲に影響を与えていた。社会人経験者については、今回投入した変数のなかで唯一の規定要因といってよいだろう。高卒直後入学者については、そもそも約7割の高卒直後入学者が授業に満足しているなかで(表3)、満足できていない者は就学意欲が低下しているようである。また、職業的価値に対する評価も高卒直後入学者の7割以上が「高群」に属していたが(表8)、そうしたなかで看護師の仕事に対し使命感や重要性を強く感じられない者は、就学意欲を低下させている。

さて、今回、相談できる教員の有無は学生の就学意欲に影響を与えていないという結果になった。相談できる教員の有無と就学意欲をクロス集計してみると(表は省略)、相談できる教員が「いない群」で、学校をやめたいと「頻繁に思う」者は31.2%であり、相談できる教員が「いる群」の14.8%を大きく上回る。フィッシャーの直接確率検定の結果でも5%水準で有意な差が確認された。社会人等経験者と高卒直後入学者に分けて分析してみると、高卒直後入学者のみ、有意な差がみられた<sup>8)</sup>。しかし、他の変数の影響を統制したロジスティック回帰分析では、表10のとおり、相談できる教員の有無は学生の就学意欲に影響を与えていないことが明らかになった。

#### 4. 考察と今後の課題

本研究の目的は、看護学生の就学意欲に影響を及ぼす要因を明らかにすることにあつた。

調査対象者の4人に1人が、現在、通っている学校を「頻繁にやめたい」と思っていた。今回は「学校を頻繁にやめたいと思うか」という問いへの回答を対象者の就学意欲を示す変数とみなし、これと「学校に対する評価」「学内の人的資源の有無」「看護師の仕事に対する評価」「入学前の経歴」との関連をみた。分析の結果、以下の五点が明らかになった。

第一に、高卒直後に入学した者は社会人等を経験してから入学した者よりも、就学意欲が低い傾向が認められた。本稿「1. 研究の目的」で述べたように、複数の先行研究が入学動機と学習意欲の関連性を確認している。我々の調査では対象者の入学動機を尋ねていないが、准看護師や看護助手、他の仕事を辞めてから入学した社会人等経験者は高卒入学者に比べて、より積極的に明確な入学動機を有していると推測される。よって、本研究の知見は、先行研究の結果を裏付けるものといっただろう。

第二に、授業への満足度が低い者は高い者よりも、就学意欲が低い傾向が認められた。とくに社会人等経験者については、影響力の強い要因としてあらわれた。既述のとおり、社会人等経験者は看護師・看護助手の経験を持つ者と、看護師・看護助手以外の仕事に就いた経験を持つ者の双方を含む。また、高卒直後入学者よりも年齢の幅が大きいことから、学費を自ら負担する者の割合は高卒直後入学者よりも高いと推測される。費用対効果の観点から、授業に対する満足度が就学意欲に強く影響を与えている可能性が考えられる。

第三に、看護師の職業的価値に対する評価が低い者は高い者よりも、就学意欲が低い傾向が認められた。看護師の仕事について「使命感、責任感を伴うやりがいのある仕事」「人命にかかわる尊い仕事」「世の中や人のためになる仕事」「社会的に評価が高い仕事」と考える者の割合は、表6に示されたとおり、多数派である。特に前3項目については7～8割の者が「そう思う」と回答している。そのような状況下で、これらの項目に総じて同意をしない者は就学意欲が低下している傾向が確認された。

さらに興味深い点は、高卒直後入学者の就学意欲により明確に影響しているのは職業的価値の評価であって、労働条件に対する評価ではない、という点である。これが第四の知見である。不規則で多忙な業務は多くの看護学生に周知のことであり、職業的価値を見出せているか否かが就学意欲の高低に強い影響を及ぼしていることが明らかになった。

第五に、社会人等経験者と高卒直後入学者では異なる要因が就学意欲を規定していることが明らかになった。既述のとおり、社会人等経験者の場合は、授業への満足度が就学意欲を強く規定していた。とくに学内に相談できる人の有無や職業的価値に対する評価は就学意欲と関連がなかった。一方、高卒直後入学者は、授業への満足度のほかに、相談できる友人の有無、そして職業的価値に対する評価が就学意欲を左右していた。ただし、本研究は（頻繁に学校をやめたいと思いつつも）就学している者を対象とした調査である。就学意欲が全くなくなってしまった者、すなわち退学者に対する調査を行った場合、別の要因が析出される可能性がある。

本研究の分析データは、有意抽出で得たサンプルであり、看護学生を代表するサンプルではない。また、サンプル数が非常に少なく、得られた知見を一般化できるかは、より多くのサンプルを用いた分析が必要である。また、サンプル数が少ないため、大学生と専門学校生を区別した分析や学年別の分析も不可能であった。さらなる研究の蓄積が必要と思われる。

**注：**

- 1) ただし、18歳人口は今後、再び減少の局面に入る。国立社会保障・人口問題研究所の「日本の将来推計人口」(2017年推計)によれば、2040年には88万人になると試算されている。
- 2) 文部科学省「学校基本調査」に基づく。
- 3) 厚生労働省「看護師等学校養成所入学状況及び卒業生就業状況調査」の結果によると、2020年に看護師養成課程をおく学校(大学・短大・専門学校など)への入学者数は64,584人で、2010年の60,257人と比較すると増加しているが、ここ数年は減少傾向にある。
- 4) 厚生労働省「看護師等学校養成所入学状況及び卒業生就業状況調査」の結果によると、2020年の卒業生59,248人中、看護師として就業した者は52,253人だった。ほかに養護教諭になる者、看護師学校等に就業する者、進学する者もいる。
- 5) 「経済的な面に惹かれた」「人に勧められた」「何となく」という職業志望動機の「強い群」は「弱い群」よりも「高ストレス」状態にあること、また、「やりがいのある職業」「看護職に興味があった」という職業動機の「強い群」は「弱い群」よりも、ストレス対処力を有していたとの結論に至っている。また、「何となく」という職業志望動機とストレス反応との関連が1年生よりも専門的な学習を行う2年生で見られたことから、「何となく」という動機で入学した学生は専門的な学習がストレスになると推察される、とも述べている(大鳥・福島 2017)。
- 6) 複数の因子に同程度に高い負荷量が確認される項目を除外して分析したところ、3因子が析出されたが、1因子あたりの項目数が2以下になってしまったため、因子数を2に固定した。
- 7) 職業的価値に対する評価の分布が正規分布していなかったこと、男性および社会人等経験者のサンプルが少なくクロス集計等が難しくなること、以上の理由から3群ではなく2群に分けて分析することにした。
- 8) 高卒直後入学者の場合は、相談できる教員が「いない群」で、学校をやめたいと「頻繁に思う」者は35.1%であり、相談できる教員が「いる群」の13.5%を大きく上回る。フィッシャーの直接確率検定の結果でも5%水準で有意差が確認された。

**引用・参考文献：**

- 古川秀敏・小出水寿英・山口恭平・西垣里志・門脇千恵 2016「看護系大学生の学習意欲に影響を及ぼす要因——看護師の理想イメージ、看護学生の自己イメージ、志望動機、希望進路の観点から——」『関西看護医療大学紀要』8(1)：27-35
- 一柳陽子・谷山牧ほか 2009「看護学生の入学・職業選択動機の実態と構造」『川崎市立看護短期大学紀要』14(1)：21-27
- 鎌田美千代 2021「看護学生の学習動機づけに関する文献レビュー」『東北福祉大学研究紀要』45：143-160

- 榎本朋子・田邊美津子 2012「看護学生の入学動機と自己教育力との関連」『川崎医療短期大学紀要』32：7-13
- 南本ゆみ・中山登志子・舟島なをみ 2020「看護基礎教育機関を退学した学生の退学に至る経験」『看護教育学研究』29(1)：11-24
- 森田敏子・松永保子・浅本憲・松田好美・内海滉 2000「看護大学生の達成動機に関する研究：因子構造とその因子を規定する要因の検討」『福井医科大学研究雑誌』1(3)：447-467
- 大鳥和子・福島和代 2017「看護大学生の職業志望動機とストレス」『心身健康科学』13(2)：62-71
- 住谷圭子・甘佐京子ほか 2015「看護専門学校生の学業継続に影響する要因」『人間看護学研究』13：43-49
- 鈴木美代子・井上都之ほか 2012「看護学生の看護のイメージと個人要因との関連について」『岩手県立大学看護学部紀要』14：33-48
- 竹本由香里 2008「看護学生の看護系大学への進学志望動機の検討」『宮城大学看護学部紀要』11(1)：13-20

## Factors that Affect Nursing Student's Desire to Attend School

Ryoko AOYAGI

This study aimed to elucidate factors that affect nursing students' desire to attend school. We conducted a questionnaire survey with approximately 160 students attending nursing school or a four-year university nursing course. We then collected data with regard to students' evaluation of their affiliated school, the presence or absence of having someone to consult in times of trouble, students' evaluation of nurse work, and their desire to attend school. We then analyzed the relationship between the data.

As a result, we found that for individuals with experience, such as working adults, who entered school, the desire to attend school was determined by the level of satisfaction in classes. Conversely, for individuals who entered school immediately after graduating high school, we found that in addition to the level of satisfaction in classes, the desire to attend school was determined by the presence or absence of a friend to confide in and the evaluation of the professional value of nursing work. Furthermore, we found that the evaluation of working conditions in nursing work was not related to nursing students' desire to attend school.

Keywords: Desire to Attend School, Satisfaction in Classes, Professional Value, Nursing Education